

歴史に学ぶ

大阪経済大学客員教授・経済評論家

岡田 晃

第三回 中小企業の「希望の星」～真田一族

戦国武将の人気ナンバーワンと言えば、真田幸村（信繁）だろう（本稿では幸村で統一する）。信州の一豪族、いわば地方の中小企業だった真田氏だが、上田城で徳川の大軍を二度も打ち破った上、大坂の陣で大活躍した幸村の生涯は、現代の中小企業に希望と元気を与えてくれる。

存亡の危機の連続だつた真田家

だが、そうした華々しさとは裏腹に、真田家の歴史は存亡の危機の連続だった。幸村の祖父・幸隆は信州小県郡（現在の長野県東信地方）の豪族だったが、甲州から進出してきた信玄の家臣となり、頭角を現していった。信玄は越後の上杉謙信と対峙するが、幸隆はその最前線で活躍したという。その功績によって信玄の信頼を得て、外様でありながら譜代の家臣と同等に扱われるようになる。

現代になぞらえれば、大企業の傘下に入った中

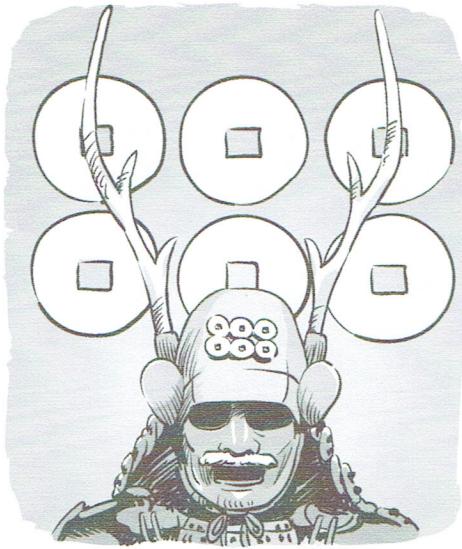
小企業が実力を發揮して親会社のトップに信頼され、グループの中で重きを置くようになったようなものだ。

幸隆には長男・信綱、次男・昌輝、三男・昌幸の息子がいて、長男の信綱が家督を継いだ。ところがその翌一五七五年の長篠の戦いで、その信綱と昌輝が討ち死にしてしまった。三男の昌幸はすでに他家の養子となっていたため、真田家は跡継ぎがいなくななり、存亡の危機に立たされたのである。そこで一族が相談の末、昌幸を呼び戻して真田の跡を継がせた。一族の結束で最初の危機を脱したのだった。

昌幸も武田家で重きをなし、これで真田家は安泰かと思われたのも束の間、肝心の武田家は織田信長の攻撃であっけなく滅亡した（一五八二年）。ここで織田に従うか、それとも抵抗するかの選択を迫られた昌幸は、京や他国情報も集めて天下の情勢を冷静に読み、織田に従うことを決断する。この時点の情勢判断は正しかったと言える。

昌幸も武田家で重きをなし、これで真田家は安泰かと思われたのも束の間、肝心の武田家は織田信長の攻撃であっけなく滅亡した（一五八二年）。ここで織田に従うか、それとも抵抗するかの選択を迫られた昌幸は、京や他国情報も集めて天下の情勢を冷静に読み、織田に従うことを決断する。この時点の情勢判断は正しかったと言える。

徳川の大軍を一度も打ち破る



さて、このような昌幸に怒った徳川家康が、鳥居元忠ら約七千の軍勢を送り上田城を攻めさせた。対する真田軍は二千に足りなかつたが、徹底したゲリラ戦術で徳川軍を撃退した。徳川軍は千三百人の戦死者を出したという。真田軍の死者はわずか約四十人。人数は誇張して伝わっている可能性があるが、それでも「快挙」である。これを第一次上田合戦という（一五八五年）。

当時の家康は、信長亡き後の天下をめぐり豊臣秀吉（当時は羽柴秀吉）と権力を競っていた時期である。その徳川を打ち破った真田の名は一挙に全国に広まつた。これによつて真田は、天下を獲つた秀吉の下で大名として認められた。いわば、地方の有力企業から全国ブランドに飛躍したのだ。

一方、昌幸と幸村は再び上田城に立てこもり、徳川秀忠軍を迎へ討つた（第二次上田合戦）。徳川軍三万八千に対し、真田軍はわずか三千。再びゲリラ戦術を駆使して徳川軍を苦しめた。結局、秀忠は上田城攻略をあきらめて西に向かつたが、関が原の戦いに間に合わなかつた。一度も徳川を破つた真田の名声はさらに高まつた。

だが一六〇〇年、関ヶ原の戦いで運命の岐路を迎える。昌幸と次男の幸村は西軍、長男の信幸（後に信之）は東軍と、敵味方に分かれたのだ。やむにやまれぬ判断だつたが、真田家を存続させるためのリスク分散、危機管理策でもあつた。それが功を奏し、信幸の家系は大名（信州上田藩主、松代藩主）として明治維新まで続くことになる。

一方、昌幸と幸村は再び上田城に立てこもり、徳川秀忠軍を迎へ討つた（第二次上田合戦）。徳川軍三万八千に対し、真田軍はわずか三千。再び

ゲリラ戦術を駆使して徳川軍を苦しめた。結局、秀忠は上田城攻略をあきらめて西に向かつたが、関が原の戦いに間に合わなかつた。一度も徳川を破つた真田の名声はさらに高まつた。

そしてついに決戦の時がやつてきた。一六一四年の大坂冬の陣では大坂城の南側に真田丸を築き、徳川軍に多くの損害を与えた。翌年（一六一五年）の夏の陣では家康の本陣に突っ込み、あと一歩のところまで家康を追いつめたという。

九度山の蟄居生活——苦しくてもあきらめず、次へのタネをまく

だが西軍の敗戦によつて真田はさらなる危機に直面する。東軍についての長男・信幸の助命嘆願もあって、昌幸・幸村親子の命は助けられたものの、紀州九度山に蟄居処分となり、以後十四年間、二人はここで忍辱の生活を送ることとなつた。それでも幸村はあきらめなかつた。実は、幸村は十代から二十代の頃、何度も人質生活を味わつてゐる。最初は十二歳の時（十五歳説もあり）。

昌幸が信長に従つた証として、信長から関東支配を任されて高崎にいた滝川一益の元に送られた。信長の死後は、越後の上杉、さらに天下を獲つた秀吉の人質として過ごした経験を持つてゐる。そ

んな忍耐強さが蟄居生活を支えたのだろう。

九度山の生活は経済的にも苦しかつたようだ。幸村の正室が真田紐を考案し、家臣が全国を行商して家計を助けたという伝承が残つてゐる。全国の情報を集める目的も兼ねていたといふ。

どんなに苦しくても決してあきらめず、次への備えを怠らなかつたのである。コロナ禍に苦しむ現代の我々に、大事な教訓を残してくれたようだ。

そしてついに決戦の時がやつてきた。一六一四年の大坂冬の陣では大坂城の南側に真田丸を築き、徳川軍に多くの損害を与えた。翌年（一六一五年）の夏の陣では家康の本陣に突っ込み、あと一歩のところまで家康を追いつめたといふ。

最後は力尽きて討たれてしまうが、実はこの時に家康は幸村に討たれ、その後の家康は影武者だつたという説がある。都市伝説のようなものだが、それほどに幸村は憧れの的となつたのだ。

こうして幸村と真田一族から、私たちは元気をもらうことができる。同時に、コロナ禍を乗り越えようとする現代の中小企業にとって、多くのヒントを与えてくれる「希望の星」なのである。

岡田 晃

（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ（米国現地法人）社長、理事・解説委員長を務める。二〇〇六年から現職。